

『ファウスト』 雑感 XI

— 支配者の悲劇 —

Notizen über „Faust“ XI

— Tragödie des Herrschers —

漆 谷 克 秀

Katsuhide Urushidani

## 11. 支配者の悲劇 (Tragödie des Herrschers)

最終の第五幕は、第四幕を前提にして幕が開く。第四幕の終末から幾歳月過ぎたことであろうか。第五幕では、権力を持つ支配者、統治者としてファウストが登場する。

本文中に、ファウストの年齢についての言及はない。五幕で登場するファウストについて「ちょうど 100 歳だ」とゲーテは語っており、皇帝のために戦っていた(?) 四幕では 50 歳ということで、50 年ぐらいの年月が経っていることになる。皇帝から賜った海を干拓して土地も造成され、そこに都市ができていたのであり、それには 50 年の年月が必要ということであろう。もし、その都市が張りぼてのまやかしでなければ、妥当な数字ともいえよう。第一部で、最初に登場した時のファウストが 50 歳ぐらいで、「魔女の厨」で霊薬を飲んで 20 歳の青年に若返っている。一部、二部を通して 80 年の歳月が流れたということになり、メフィストフェレスもその間、下僕として仕えていたのだから大変である。しかし、年月に合わせて経時的にこの作品を考えていくのも、無理がある。時間、空間を超越した作品であると考えておくのが無難であろう。

第五幕は「開けた土地」(OFFENE GEGEND) という場で幕が上がる。登場人物は「旅人」(WANDRER) と、「バウキス」(BAUCIS)、「フィレモン」(PHILEMON) という老々夫婦である。この夫婦はギリシャ神話から名前を借用しており、無残な死を遂げる「旅人」は最高神ゼウスということになるだろうか。この老々夫婦は、貧しく慎ましく暮しながら、神を篤く信じ、人間を愛し、自然の根源的な力と交わり、仲睦まじい素朴な夫婦である。そして、次の場「宮殿」(PALAST) に登場する「高齢」(im höchsten Alter) のファウストと対比されている。

海がまだ海であった頃、「旅人」はこの海で遭難した。そして、この夫婦に救助されたのである。若者だった頃の思いを胸にこの老々夫婦を訪ねてきた。果てしなく海で、砂丘が広がっていたところは、大地となって、既に多くの人間が住みついている。干拓されてできた土地には、草地や牧草地が広がり、庭や森や村がつづく樂園のような様相を見せている。また港には、多くの船が出入りして、交易の品々が運ばれて莫大な富をもたらしている。その中には掠奪品も多くあるようだ。昔の面影を残すのは、菩提樹の木立に囲まれたこの老々夫婦の住む辺りだけである。しかし、フィレモンが語る中には、完全に人間のものになった土地を眼前にしながらも、馴致を受けつけない自然も対置されている。この変わりように言葉がない旅人に、バウキスがいう。

BAUCIS. Wohl! ein Wunder ist's gewesen!

Läßt mich heut noch nicht in Ruh;

Denn es ging das ganze Wesen

Nicht mit rechten Dingen zu. (11111-14, S.335)

バウキス。　　そうなの！　不思議なことばかりでした！  
今になってもまだ、気持ちが落ちつかないまま。  
というのね、すべての営みが  
ただごとではありませんでしたから。

この干拓事業がなにか怪しげな尋常ではない出来事のようにバウキスは感じていて、いまだに気持ちの休まることもない。そしてまだ、この事業は継続されている。さらに、バウキスは次のようにいう。

BAUCIS. Tags umsonst die Knechte lärmten,  
Hack' und Schaufel, Schlag um Schlag;  
Wo die Flämmchen nächtig schwärmten,  
Stand ein Damm den andern Tag.  
Menschenopfer mußten bluten,  
Nachts erscholl des Jammers Qual;  
Meerab flossen Feuergluten,  
Morgens war es ein Kanal.  
Gottlos ist er, ihn gelüftet  
Unsre Hütte, unser Hain;  
Wie er sich als Nachbar brüstet,  
Soll man untertänig sein. (11123-34, S.335)

バウキス。　　昼間は手下たちがいたずらに騒ぐばかり、  
鍬やシャベルでたたきつけるだけ。  
夜、いくつもの小さな炎がうごめきまわっていたところに、  
次の日には土手ができている。  
人身御供にされた人たちの血も流されたに違いない。  
夜には、哀れな苦悶のうめき声が響いてきた。  
海のほうへと灼熱の炎が流れていった、  
朝には、そこに運河があった。  
あの人は神も怖れない、この小屋も、この林も  
欲しくてたまらない。  
あんな人が隣人として威張りくさっているのですから、  
みんな恭順にしていますよ。

昼は騒ぎ立てているだけで、本当の仕事は夜になされているようで、怪しげな様相を見せ

ている。よくは分からないが、どうも多くの人間の血が流されているようだ。自分の思いどおりにしたく、何もかも欲しがるとこの支配者に、民衆は一応、恭順の態度を示している。だが、おそらくバウキス同様に、胸に秘める思いがあるであろう。この老々夫婦は、幸福も禍も自然に委ねて暮している。そして、次の場で事件がおき、それがファウストに影を投げかけることになる。この老々夫婦の最後の言葉は、次のようなものである。

BAUCIS. Traue nicht dem Wasserboden,  
Halt auf deiner Höhe stand!  
PHILEMON. Laßt uns zur Kapelle treten,  
Letzten Sonnenblick zu schaun!  
Laßt uns läuten, knieen, beten  
Und dem alten Gott vertraun! (11137-42, S.335)

バウキス. あんな水の大地、あてにしないで、  
あなたのこの高みでこそ、耐えていきましょうに！  
フィレモン. さあ、礼拝堂に入りましょう。  
太陽の最後の一瞥を惜しみましょう！  
鐘を鳴らし、ひざまずいて、祈りましょう  
そして、昔ながらの神さまに身を委ねるのです。

ゲーテは若い頃から数知れず、語を造ってきた。,'Wasserboden' もそのひとつであろうか。,'Wasser'(水)と,'Boden'(土地)の造語である。独和辞典をみても該当する語は見当たらない。それ以外にもいくつかの辞書をみてみたが、やはり該当するような語はなかった。どのように訳せばよいのか？ と一ヶ月以上考え込んでいる。いまだに適当な言葉が浮かんでこない。,'Wasser' と,'Boden' では、,'Wasser' が優位にあることが明らかに見て取れる。「干拓地」や「埋立地」というぐらいでよいのではと考えていたが、それでは「水」が持つネガティブな意味合いが感じられなかった。手塚富雄訳では「海を埋め立てたあんな場所」となっており、山下肇訳では「あんな埋立地」となっている。池内紀訳では「あんな水っぽい土地」となっていて、「あんな」という語を持って否定的なニュアンスを付与している。定冠詞にそれを見ているのであろう。この定冠詞にはアクセントがあるようだ。ドイツで干拓地といえば、北海に面してオランダと隣接する地域、バルト海に面した地域ということになるが、それぞれ固有の名称をもっている。わたしは「水の大地」と訳しておく。コロナが少し収まっていた今年(2022年)の5月末に東北を旅行した。「なまはげ館」に行った後、「世界三景」とかいうので、男鹿半島の山に登り、その展望台から八郎潟を見た。オランダの技術を導入して、埋め立てられ、大部分が田面になっている。田植えの時期が始まるのであろう、一面に水が張られていた。道路や一部の集落の所だけに土地が見えている。広大な水田が太陽の

光を乱反射させている。砂州を挟んで、日本海も見える。明らかに水の色が違う。遠くまで見渡せるだけに、キラキラと光っている八郎潟の干拓地には水没しているのではないかという錯覚に陥った。人工であるが故の脆弱さを感じたのであろう。やはり穏やかな生活を営むには土を見せている「高み」が良さそうだ。パウキスのことばには、長い年月を海とともに暮してきた生活者の実感がある。

フィレモンの台詞にも素晴らしい造語がある。それは、*„Sonnenblick“* である。もちろん辞書にはない。直訳すれば「太陽のまなざし」というぐらいであろう。ここでは *„letzt“* (最後の) という形容詞が付加されている。手塚富雄訳では「沈んでいく日に別れを告げよう」と、山下肇訳は「みんなでお天道さまの沈むところを拝みにね」で、池内紀訳は「あそこから夕日がよく見える」となっている。わたしは沖縄に来て、朝日や夕日を見るようになった。首里の高台に住んでいた頃、住处から東シナ海に沈む夕日が見られた。沖縄市の海邦に住んでいた頃は朝日が家から見られた。朝日の昇るときもそうだが、夕日が沈むとき、太陽の最後の一片が隠れる間際の一瞬、まわりが輝くように明るい光彩を放つ。そしてすぐに暗くなっていく。わたしは、このゲーテの造語をみたとき、その光景が脳裏にひらめいた。光彩を放ちながら沈み込む最後の一瞬、太陽がわたしたちを見詰めている、そんな感覚を持った。この造語は、それを表現していると思えたのである。ゲーテの眼と感受のすごさを感じて、なにか嬉しくなったのを覚えている。なにげない「最後の」という付加語も素晴らしい。*„schauen“* は「みる、眺める」という意味だが、むしろ太陽から見られているように思い、人間たちは見られているのを見ているわけで、「惜しみましょう」と訳した。まったくの誤訳であろう。それでよい、名訳だと自分では思っている。

老々夫婦と旅人は、昔ながらの神に祈り、今まで、かわり映えもしない生活を続けている。わたしはそのような生活に魅せられもする。しかし、近代という時代が求めているもの、それが、年寄りには重大な危機として迫っている。打ち鳴らされる鐘の音は悲しい。老翁の祈りも、悲しい。「デジタル」の時代だといって、「アナグロ」世代がいじめられているようなものである。

さて、支配者となったファウストは、どのような状況にあるのか。次の「宮殿」(PALAST)の場で、「望楼守リンコイス」(LYNKEUS DER TÜRMER)が、日が沈み、最後の船の帰港を告げるなか、老々夫婦のチャペルから鐘の音が鳴り響いている。

FAUST auffahred. Verdammtes Läuten! Allzuschändlich

Verwundet's, wie ein tückischer Schuß;

Vor Augen ist mein Reich unendlich,

Im Rücken neckt mich der Verdruß,

Erinnert mich durch neidische Laute:

Mein Hochbesitz, er ist nicht rein,

Der Lindenraum, die braune Baute,

Das morsche Kirchlein ist nicht mein.  
Und wünscht' ich, dort mich zu erholen,  
Vor fremdem Schatten schaudert mir,  
Ist Dorn den Augen, Dorn den Sohlen;  
O! wär' ich weit hinweg von hier! (11143-50, S.336)

ファウスト（ギョとして）、いまましい鐘の音だ！不快きあまりなく  
悪意のこもる一撃のように、こころに傷をつける。  
眼の前には、おれの領土が果てしなく広がる。  
背後では、からかわれているようでおれは不愉快な気分になり、  
ねたんだ音声が思い起こさせるのだ、  
おれの所有している土地、それもまだ欠けている、と。  
菩提樹の植わるあの土地、うす茶けた建物、  
崩れかかった小さな教会も、おれのものでない。  
あそこで身も心も休めてみたい、  
だが、見知らぬ影に、身の毛がよだつ、  
それは、眼に刺すとげ、足の裏に刺すとげだ。  
ああ！ここから遠く離れてしまいたい。

ファウストは、「人間精神の傑作」と自負する壮大な事業を見渡すのに、この老々夫婦の小屋や小さな教会が目障りなのである。無視すれば、それで済むようなことなのだが、そんな些細なことによって傷つき、支配者ファウストの不満が大きく展開していく。人間は、他の人々との関わり合いのなかで生きていかねばならない。一人だけで生きていけるわけではなく、周りとの軋轢が生じるのも必然であろう。多くの不満は、互いに自己と折り合いがつけられないから起こる。相手が自分よりも弱い存在、小さな存在あれば、さらに我慢ができないのだ。ブレンディみか子氏は自著『私たちのテロル』（岩波書店）のなかで、マックス・スティルナー（Max Stirner）の次のような言葉を引用している。「国家は『暴力を』を繰り返すふるうが、個人はそれをしてはいけぬ。国家のふるまひは暴力でも、国家はその暴力を『法』と呼び、個人が行えば『犯罪』と呼ぶ」（230 ページ）。「国家」を「権力者」と置き換えても概ね妥当であるといえよう。権力者の暴力は、現代の政治情勢のなか、世界のいたるところでみられる。「正義」を旗印にした「法」の執行だとして、多くの悲劇を生み出している現状を我々の周りでも認めることができよう。このあとに老々夫婦に起こる悲劇は、「法の執行」ということになるのであろうか。

ファウストは、この老々夫婦の住もう処で「休息する」（sich erholen）ことを願う。これはどうしてなのであろう。さりげないこの詩行（11147）を見逃していた。自分の意のままにならぬ土地があることに苛立ち、それが自分に帰順したところで、ファウストは、安らぐこ

とができるのか。ファウストは、おそらく疲れも感じているのであろう。人智を結集した「人間精神の傑作」に住むことが、高齢の老人にとって心地よいものとも思えない。

ファウストはチャペルからの鐘の音に不快感を覚えている。本来、鐘の音を耳にして、日常の平穏さを感じ、神からの安らぎを抱くものだが、ファウストはそれを自分から締め出している。領土の拡張、権力、支配力の拡大をなおも目指しているからであるのか。いまや、自らが創造したものに、またそれに附随したものに、自己の支配力が及ばないものがある限り、十全の喜びを抱くことができないのだ。しかしまた、老々夫婦が営む生活のなかにも「見知らぬ影」を覚えて、ファウストは、それに怯えている。「喜び」とは何なのであろう。

そのようなときに、メフィストフェレスが率いる船団が帰ってきた。

MEPHISTOPHELES. . . . .

Nur mit zwei Schiffen ging es fort,  
Mit zwanzig sind wir nun im Port  
Was große Dinge wir getan,  
Das sieht man unsrer Ladung an.  
Das freie Meer befreit den Geist,

. . . . .

Man hat Gewalt, so hat man Recht.

Man fragt ums Was, und nicht ums Wie.

Ich müßte keine Schiffahrt kennen:

Krieg, Handel und Piraterie,

Dreieinig sind sie, nicht zu trennen. (11173-77, 11184-88, S.337)

メフィストフェレス. . . . .

たった二隻の船で出て行って、  
二十隻の船で港に帰ってきている。  
なんという大きな事を成し遂げたのか、  
それはおれらの積荷を見れば分かる。  
自由な海は精神を解放する。

. . . . .

力を持つものに正義がある。  
分捕ったものが問題であり、手段じゃない。  
おれは、航海のことで知らぬことはない。  
戦争、商売、海賊と、  
それらは三位一体で、切り離せるわけでない。

二隻で出港し、二十隻になって帰ってくるとは、どのような交易をおこなったのであろう。悪事をはたしているのだろうが、それも三位一体として、まったく気にとめてもないメフィストフェレスの生来の明るさには驚く。なによりも「結果」(Was)が重要なのだ。また、メフィストフェレスは、「あの三人の乱暴な大力男」(Die drei gewaltigen Gesellen)をつけて登場している。定冠詞付きのこの連中は、前の第四幕の戦争の場で、メフィストフェレスの手下として、ファウストの参謀として活躍していた。今はただ、宴会をすることと、収奪物の過分な分け前にあずかることだけを欲している。

1492年10月12日のコロンブスによるアメリカ大陸の発見など、ファウストが生きていた頃は、まさに大航海の時代であった。当時の交易とはどのようなものであったのであろうか。コロンブスなど、ヨーロッパの視点からその業績を見られるが、とどのつまり、多くの原住民を虐殺した掠奪集団であった。風土病の梅毒までもヨーロッパに持ち帰ったといわれているが、それは、原住民の女性を陵辱してまわった証左である。北欧のヴァイキングも、なにも最初から、海賊として大洋に漕ぎ出していったわけではない。交易を求めて商談に及ぶのだが、それがまともにならない場合、海賊となって略奪に及ぶことがあったということである。当時の海洋に進出していった国々の海軍には、多分に海賊の要素があったといえよう。むしろ海賊が軍服を着ていたといってもよいだろう。

ここで、権力者ファウストのくどくどという愚痴を聞いてみよう。大国と称しているどこかの大統領も同じような愚痴を並べているかもしれない。そもそも愚痴を聞くことだけでも、面倒なことで、権力者のそれなら、さらに辛いことであろう。一般庶民はそれに反抗できない。愚痴は、言っても仕方ないことを言って嘆くことであり、それで事態が良くなることはない。本来、力のない弱い者の腹いせのようなものである。ここでファウストは、愚痴を漏らすことを恥ずかしく思っており、心の迷いや貧しさをそこに認めている。だから、世故に長けた年来の従者メフィストフェレスだけにこぼすのである。

FAUST. . . . .

Die Alten droben sollten weichen,  
Die Linden wünscht' ich mir zum Sitz,  
Die wenig Bäume, nicht mein eigen,  
Verderben mir den Weltbesitz.  
Dort wollt' ich, weit umherzuschauen,  
Von Ast zu Ast Gerüste bauen,  
Dem Blick eröffnen weite Bahn,  
Zu sehn, was alles ich getan,  
Zu überschaun mit einem Blick  
Des Menschegeistes Meisterstück,  
Bestätigend mit klugen Sinn



Der Völker breiten Wohngewinn. (11239-250, S.338-9)

FAUST. Das Widerstehn, der Eigensinn

Verkümmern herrlichsten Gewinn,

Daß man, zu tiefer, grimmiger Pein,

Ermüden muß, gerecht zu sein. (11269-272, S.339)

ファウスト. . . . .

あそこの老人たちは立ち退かせるべきだった、

菩提樹の処を座る場所にしたいのだ。

わずかの木々、それらがおれのものでないおかげで、

おれの世界占有を台無しにする。

あそこでおれは、遠くまで四方を見回すため、

枝から枝へと足場を造らせたいたのだ、

おれがなしたことすべてを見るために、

人民たちの住むためにかちとった広大な土地を

賢明な分別でもって実証しながら、

人間精神の傑作を

一目で見渡すために。

ファウスト. 反抗と強情が

とてつもなく素晴らしい成果も台無しにする。

それで、深刻な腹立たしい苦痛となって、

公正であることに疲れてしまう。

ファウストのなんという言い草なのであろうか。また、「こんなふうになれわれは、富んでいるのに、自分たちに欠けているものを感じるとき、／ もっとも手厳しく苦しめられているのだ」(So sind am härtesten wir gequält, / Im Reichtum fühlend, was wir uns fehlt.) (11251-52, S.339)ともいう。ここでは主語に、一人称複数形, wir ‘が使われている。これには、ファウスト自身の感情であるのに、それがあたかも一般的な感情であるかのように拡張させていこうとする意図が見いだされ、自己の正当化を図るものである。この老々夫婦を立ち退かせたいのは、自己の仕事の成果を眺望したいという欲求からであり、自分だけの勝手な都合である。この老々夫婦は、ファウストが事業を始める以前からこの地に住み、昔ながらの営みを続けているだけなのだ。

ファウストはメフィストに、代替地を与えて老々夫婦を立ち退かせるように命じる。メフィストはそれを簡単に引き受けて、「観客に」、旧約聖書の「列王記」の故事をもって説明する。

「ずっと以前に起こったことが、ここでも起こる、/ ナボテのブドウ畑のことがありましたよね」(Auch hier geschieht, was längst geschah, / Denn Naboths Weinberg war schon da.) (11286-7, S.340)

次の場「夜更け」(TIEFE NACHT)は「望楼守リンコイス」の歌で始まる。夜も更けて、漆黒の闇につつまれている。そのなか、望楼で歌うリンコイスのこの歌を、ホーフマンスタールはゲーテの「白鳥の歌」(Schwanengesang)と名付けている。瀕死の白鳥が美しい声で鳴くという古い言い伝えから、詩人や芸術家などの辞世の詩歌や死の直前の演技、演奏などを「白鳥の歌」と呼ばれている。この美しい詩歌を、ゲーテは1831年4月に書いている。それは死ぬ一年前で、82歳のゲーテが、「見たものすべて美しい」と人生賛歌、生の肯定を唱歌するリンコイスに寄せて、自らの心境を唄ったものであるといわれている。いずれ、「余滴」として、この歌を取り上げたい。

「幸せの眼」(Ihr glücklichen Augen)をもつリンコイスの明るい人生の賛歌は、突如、痛ましい燃えあがる火事を目の前にして、悲しみの哀訴する調べに変わる。あまりにも良く見える目は、火事の様相を一部始終認め、日頃から火に心を配っていた善良な老々夫婦のことを思うのである。長い時が経ち、火も燃え尽きて収まり、この歌は次のように終わる。

Was sich sonst dem Blick empfohlen,  
Mit Jahrhunderten ist hin. (11336-7, S.341)

今まで眼に好ましく委ねられていたものが、  
数百年の歳月とともになくなっていった。

海への眺望が開け、菩提樹の大木が生い茂って、枝葉の間から陽光がこぼれ揺らめく高台、そこに家屋と夕陽を臨む小さなチャペルが立っていた。その光景は数百年の歳月とともにあって、人為もその景観になじみ、溶け込んで自然と化している。それが寸時にして失われたのだ。メフィストフェレスが無理矢理立ち退かそうとして旅人と諍いになり、その時に炭火がわらに移動して火事になった。つまり、この火事はメフィストフェレスが意図的に起こしたものでなく、不可抗力だったらしいのである。建物や菩提樹は灰燼と帰し、老々夫婦や旅人は無残な最期を遂げることになる。メフィストフェレスは、この火事を三人の火葬のためのものでもあり、手間が省けたようにも報告する。それを聞いてファウストは言う。そして合唱がそれに続く。

FAUST. Wart ihr für meine Worte taub?  
Tausch wollt' ich, wollte keinen Raub.  
Dem unbesonnenen wilden Streich,  
Ihm fluch' ich; teilt es unter euch!

CHORUS. Das alte Wort, das Wort erschallt:  
Gehorche willig der Gewalt!  
Und bist du kühn und hältst du Stich,  
So wage Haus und Hof und – dich. Ab. (11370-77, S.342)

ファウスト. おまえたち、わしの言葉に聞く耳を持たないのか。  
交換をわしは望んだ、強奪など望まぬ。  
無思慮な乱暴な愚行、  
それをわしは呪う。それをおまえたちで分かちあえ！  
コーラス. 古くからの言葉が、それが鳴り響く、  
権力には喜んで従え！  
もしおまえが勇敢で揺るぎなく主張できるのなら、  
家も屋敷も、そしておまえ自身を賭ける。 (退場)

ファウストのこの言い草はどのように考えればよいのか。代替地で、老々夫婦が幸せな老後生活を送ることを願っていたらしいが、使いがメフィストフェレスであることを考えると、このような事態になることも想定できていたことである。殺害という咎の責任をメフィストフェレスとその部下になすりつけるファウストは権力者の典型だともいえる。命じているのだから、いかに呪うべき結果であったとしてもそれについて責任を負うべきである。また権力者は常に善人ぶっていなければならないらしい。権力者の暴力は「合法的」な行為であるから、それは「善意」に基づいていなければならないはずだ。もし、権力に反抗して声を上げるのなら、自己のすべて投げ出す必要があるし、その覚悟をもたねばならない。そう「長いものには巻かれよ」ということか。「埋立反対！」などと声高に叫ぶのは、なんの益にもならない蛮行ということらしい。

ファウスト自身も後悔しているのであろう。「命じるのも早かった、あまりにも早く執行されもした」(Geboten schnell, zu schnell getan!)(11381, S.342)と自答ながら、火事場のほうから影のように漂い近づいてくるものを感じる。もう「真夜中」(MITTERNACHT)になっていた。重苦しい気配のなか、「四人の灰色の女たち」が現われた。第一の女は「不足」(Mangel)、第二の女は「罪」(Schuld)、第三の女は「憂い」(Sorge)、第四の女は「困窮」(Not)と名告る。ファウストの部屋の前で、「憂い」を除く三人は、「中に金持ちがいる」(Drin wohnt ein Reicher)(11387, S.343)と言って部屋に入ることを断念する。「金持ち」なら「不足」も「困窮」も係わることはできない。また、権力者であるファウストに「罪」を問うこともできないであろう。ただ「憂い」だけが鍵穴から中に忍び込み、ファウストと対決することになる。三人は、兄である「死」(der Tod)の到来を告げて消えていく。ファウストに「死」が迫っている。

「憂い」という恐ろしい敵との対決に、ファウストは「人間」として道義的自律を示す。

引用も多くなるが、ファウストの言をもって示していく。それは「憂い」との掛け合うなかで表現されていく。

FAUST. . . . .

Noch hab' ich mich ins Freie nicht gekämpft.  
Könnt' ich Magie von meinen Pfad entfernen,  
Die Zaubersprüche ganz und gar verlernen,  
Stünd' ich, Natur, vor dir ein Mann allein,  
Da wär's der Mühe wert, ein Mensch zu sein. (11403-7, S.343)

ファウスト. . . . .

まだおれは、自由な境地に至るまでも戦い貫いてはいない。  
もしおれが魔法をおれの道から遠ざけることができれば、  
呪文もすっかり忘れることができれば、  
おれは、自然よ、おまえの前にただ一人の男として立っていただろう、  
そう、一人の人間としてあること、それは苦勞するだけの価値があるものだ。

今までメフィストフェレスの助力が、魔法と呪文があればこそ、ファウストが手がけた事業も為しえた。今更こんなことが言えるのかと思うような自分勝手な言い草である。しかし今、ファウストは魔法とか呪文を遠ざけることこそ、自己を「人間」として存立することになると意識している。そのような力を借りてなしえた事業に、真実なものを見いだせず、それを執行する己自身もまた悪魔と同様ではないかと、疑念を抱き続けていたのであろう。それが今回の老々夫婦殺害という悪業によって明白なものになった。いかに人類に利益をもたらし、偉大な人間の事業であったとしても、その成就に手段や所業を今まで問うてはいなかった。ただがむしゃらに前に進んでいただけであったが、ここで歩みを緩める。そして、「自然」を前にして「人間としてある」ことを問うようになる。そのような時に、呼ばれてもいないのに「憂い」が現われたのだ。

少しわき道に入る。わたしは、学部生のとき選択科目で「中国哲学」をとった。講義内容も忘れたし、教授の名前も忘れていた。教授は「老荘思想」を専門にされておられ、台湾で印刷された『老子』という冊子が教科書であった。当時、ジャン・ポール・サルトルがよく読まれていて、「実存主義」という言葉がもてはやされていた。わたしも、『存在と無』を携えて、キャンパス内を歩いたりしていた。どのような論旨であったのか忘れてしまったが、「老荘思想」を中国の実存主義と位置付けておられた。この講義で覚えていることが二点ある。一つは、「自然」という言葉で、それを読み下して説明された。「みず(自)からしか(然)り」とも読めるし、「おのず(自)からしか(然)り」とも読める。「自然」とは、「主観」と「客観」

が一つになった概念であり、自分が「よし」とするものが、全体としてもまた「よし」とすることになる、というふうに教えられた。「主體－客體」、「主観－客観」と対立概念のように考えていたのだが、「自然」という語で、なにか一つになっているように思われる。西洋の二元論でもって世界を問うのではなく、それらが、入り交じってひとつになっていくような感覚を、この「自然」という語に覚えた。ファウストが「自然」(Natur)を前にして「人間」を提示せしめようとするのは二元論の立場にあるといえる。しかしここには、「自然」への畏敬の念が秘められてもいる。

蕃書調所など江戸時代末期から明治にかけて、多くの西洋の語がおおむね漢字二文字で日本語に翻訳されている。さらに、それらの訳語は漢字圏の東アジアに拡がっていった。英語の‘nature’、ドイツ語の‘Natur’に「自然」という古い漢語をあてはめたのは、いつ頃のことか、できればどこで誰がこのようなことをなしたのか、知りたいと思った。「自然」という語には西洋の‘nature’や‘Natur’よりも、自他を越えた誕生、生成、変化、消滅の理がある大きな世界を有すると思うからである。ご存じのかたは、是非、ご教授願いたい。

もう一点は、宗教が政治に絡みついていく中国の「秘密結社」についてのことである。ここでは関連がないので、触れないでおく。

本題に戻ろう。

SORGE.      Würde mich kein Ohr vernehmen,  
                 Müßt’ es doch im Herzen dröhnen;  
                 In verwandelter Gestalt  
                 Üb’ ich grimmige Gewalt,  
                 Auf den Pfaden, auf der Welle  
                 Ewig ängstlicher Geselle,  
                 Stets gefunden, nie gesucht,  
                 So geschmeichelt wie verflucht.－  
Hast du die Sorge nie gekannt?              (11424-32, S.344)

憂い。      耳にはわたしを聴きとれなくても、  
                 心の中でどよめいているはずです。  
                 いろいろと姿を変えて  
                 わたしは非道な暴力をふるいます。  
                 路上でも、波の間でも。  
                 永遠に不安を与えつづける道連れ、  
                 求められてもいないのにいつもいるのです。  
                 呪われもしますが、よく褒められもするのです。－  
                 あなたは、憂いをまだ知らなかったの？

「憂い」からは忍び寄る音も聞えてこない。「憂い」は、いろいろと姿を変え（形姿がないということか）、心の内に巣くって不安を与えつづけている永遠の伴侶である。「憂い」は、過去の事柄に起因し、その解消を先延ばすことで、未来に恐怖を与える危険な敵である。人間の行動意欲を内部からむしばみ、救いようのない無力感を与えて絶望へと引きずり込み、滅びへと導く。しかし、ファウストは何故か「憂い」というものを知らないようなのだ。このことは「憂い」にとっても驚きのようだ。

ここでファウストは、「憂い」に対して、いかなる時間においても常に欲求し、激しく飽くことなく生き抜いてきて、喜びを感じ、苦しみ悩み、認識できることも手につかむことができるのも、この地上にあってこそそのことであり、天上のことやあの世のことなど考えられない、と言う。そして、「憂い」を「呪われた幽霊」(Unselige Gespenster)(11387, S.346)と呼び、その力を認めようとしな。怪しげなまやかしの魔術などに信をおかなくなったファウストに「憂い」は息を吹きかける。その息によってファウストは失明する。

しかし、どうなのであろう。「憂い」を知らないことがどうして失明とつながるのか。盲目になったファウストは言う。

FAUST, erblindet.

Die Nacht scheint tiefer tief hereinzudringen,  
Allein im Innern leuchtet helles Licht;  
Was ich gedacht, ich eil' es zu vollbringen;  
Des Herren Wort, es gibt allein Gewicht.  
Vom Lager auf, ihr Knechte! Mann für Mann!  
Laßt glücklich schauen, was ich kühn ersann.  
Ergreift das Werkzeug, Schaufel rührt und Spaten!  
Das Abgesteckte muß sogleich geraten.  
Auf strenges Ordnen, raschen Fleiß  
Erfolgt der allerschönste Preis;  
Daß sich das größte Werk vollende,  
Genügt ein Geist für tausend Hände. (11499-510, S.346)

ファウスト（盲目になって）。

夜がますます深く、深く押し入ってくるようだ。

しかし心の中では、明るい光が輝く。

おれが思ったこと、それをおれは急いで成し遂げる。

主人の言葉、それはきわめて重い。

寝床から起きろ、おまえたち下僕ども！ みんな起きるのだ！

おれが考え出した大胆な企てを、うまく見えるものにしろ、  
道具を手にとれ、鍬や鋤を使うのだ！  
定められた仕事はすぐさまやりとげねばならない。  
順序どおりに、せっせと励めば、  
素晴らしい報償がついてこよう。  
偉大な仕事が完成されるためには、  
千の手に対して、一つの精神があれば十分だ。

ファウストは「憂い」の力を認めず、自分の意志を貫こうとして盲目になった。目的や目標を定めることは誰でもすることである。しかし、悩むこともなく、躊躇することもなく、その実現にむかって自分の意志を通しつづけることなどあり得ない。それを押し通すことは、盲目になっていることなのでもあろう。周囲のことは何も見えていない、心の中に輝く明るい光を見る、という。それはどういうことなのか。内面を見詰め、そこから光輝が顕れる、このような表現には通常、ポジティブな肯定的な意味が付与されている。ここではなにか違うようだ。この光はなにを照らしだしているのだろうか。失明する以前のファウストと失明後のファウストに違っているものを見いだせようか。ただ違っているのは、ファウストの意志が悪魔や呪文などから切り離されたというだけであって、その言動において、権力者としての支配者としての姿はまったく変わっていない。ただ事業への意欲だけが顕現している。つまり、この光は、ファウストの精神を照らしだし、自己の欲望の拡大、事業の成就への意志を、さらに明らかにさせたのである。また、ファウストは迫り寄る「死」を自覚していたのでもあろう。もう「時間」はないのだ。

ゲーテは権力を有する「支配者」をどのように考えていたのか。先にも触れたが、犯罪の場である火事場から立ち上る煙が影のように吹き寄せられて、ファウストの部屋の前に四人の「灰色の女」が現われる。第一の女が「不足」、第二の女が「罪」、第三の女が「憂い」、第四の女が「困窮」で、「金持ちがいる」と言って、他の三人は立ち去り、「憂い」だけがそこに留まる。支配者は金持ちなのであろうから、物質において「不足」はないし、「困窮」することもない。直接手を下していないかもしれないが、ファウストは罪を犯している。「罪」が立ち去るのは、権力者は罪責を問われない「罪」とは無縁の存在ということか。人間精神の実現において事業を遂行することに、「罪」の入り込む余地はない。それは、正義に裏付けられた行為であり、たとえ犯罪行為があつたとしても、他に責任を振り向けられる。異論など許されず、「罪」を犯しても「罪」と無縁で居られる存在として「権力者」をゲーテは考えていたのであろう。そうであるなら、ゲーテのこの洞察は、現在にも当てはまる。多くの国々で「法の執行」として「権力」（武力）を行使する権力者がいる。歴史を創造しているという錯覚にとらわれているのであろう。ファウストがそうであるように、ただ「死」をもってしか、その終焉を迎えることができないのであろうか。悲しいことである。

ファウストは、自分の墓が掘られている音を、自分の最後の最大の仕事と思い込んで次の

ようにいう。これはファウストの最後の台詞であり、長くなるのをいとわずに引用してみたい。

FAUST. Ein Sumpf zieht am Gebirge hin,  
Verpestet alles schon Errungene;  
Den faulen Pfuhl auch abzuziehn,  
Das Letzte wär' das Höchsterrungene,  
Eroffn' ich Räume vielen Millionen,  
Nicht sicher zwar, doch tätig-frei zu wohnen.  
Grün das Gefilde, fruchtbar; Mensch und Herde  
Sogleich behaglich auf der neusten Erde,  
Gleich angesiedelt an des Hügels Kraft,  
Den aufgewälzt kühn-emsige Völkerschaft.  
Im Innern hier ein paradiesisch Land,  
Da rase draußen Flut bis auf zum Rand.  
Und wie sie nascht, gewaltsam einzuschießen,  
Gemeindrang eilt, die Lücke zu verschließen.  
Ja! diesem Sinne bin ich ganz ergeben,  
Das ist der Weisheit letzter Schluß:  
Nur der verdient sich Freiheit wie das Leben,  
Der täglich sie erobern muß.  
Und so verbringt, umrungen von Gefahr,  
Hier Kindheit, Mann und Greis sein tüchtig Jahr.  
Solch ein Gewimmel möcht' ich sehn,  
Auf freiem Grund mit freien Volke stehn.  
Zum Augenblicke dürft' ich sagen:  
Verweile doch, du bist so schön!  
Es kann die Spur von meinen Erdetagen  
Nicht in Äonen untergehn. –  
Im Vorgefühl von solchem hohen Glück  
Genieß' ich jetzt den höchsten Augenblick. (11559-86, S.348)

ファウスト. 沼地があこの山の麓に長く延びて、  
すべての偉業の成果を悪臭でみたしている。  
くさった泥を除くこと、  
この最後の仕事が最大の成果となるだろう、



おれは幾百万の人々のために土地を開く、  
安全ではないが、働いて自由に暮らせる土地を。  
広野は緑につつまれ、実り豊かだ、人や家畜の群れが、  
できたての大地の上で、すぐさま心地よく、  
勇敢でつとめて励む民衆が築いた  
力強い盛り土の処に住みつく。  
ここの内部は、樂園のような土地だ、  
猛り立つ外からの満つる潮がその際まで押し寄せても。  
潮が横暴に流れ込もうと、少し手を出そうものなら、  
住民が皆、急いで押し寄せ、裂け目を塞ごうとする。  
そうだ！ この意義におれは完全に信奉している。  
これこそ、人智の究極の帰結なのだ。  
日々、自由と生活を獲得しようとする者、  
ただその者だけが、それらを受けるにふさわしい。  
そしてここでは、子供も男や老人も、  
危険に取り囲まれながら、有能な年月を過ごす。  
そんな群衆をおれは見たい、  
自由な大地に、自由な民とともに立ちたい。  
そんな瞬間に向けてなら言ってもいいだろう、  
「時よ、止まれ、おまえはじつにうつくしい！」と。  
おれの地上の日々の足跡が  
永遠に滅亡していくこともないだろう、—  
そんな高らかな幸福を予感して  
おれは今、最高の瞬間を享受するのだ。

この後、ファウストはくずれおちる。「死者の霊たち」(die Lemuren)が彼を抱きしめ、大地に寝かせる。ファウストは、メフィストフェレスとの契約の賭けの言葉を言って死んだ。このことは、ファウストの魂がメフィストフェレスのものになるということで、メフィストフェレスは、自己の仕事が成就した感慨を口にする。それにしても、一人の人間を相手に80年仕えることは、悪魔にとっても長かったのであろう。まずは、メフィストフェレスの労をねぎらい、この続きを追ってみることにする。

メフィストは、ファウストのことを次のように言う。

MEPH. Ihn sättigt keine Lust, ihm gnügt kein Glück,  
So buhlt er fort nach wechselnden Gestalten;  
Den letzten, schlechten, leeren Augenblick,

Der Arme wünscht ihn festzuhalten.  
Der mir so kräftig widerstand,  
Die Zeit wird Herr, der Greis hier liegt im Sand.  
Die Uhr steht still – (11587-93, S.349)

メフィスト。      どんな快樂に足りることも、どんな幸福に満つることもなく、  
やつは絶えず、いろいろと移ろう人影を求めようとしていた。  
最後の、出来損ないの、空虚な瞬間を、  
この哀れな男はそれを引き留めようと望んだ、  
やつはおれにひどく逆らった、  
だが時間には逆らえない、この老いぼれはこの砂のなかに横たわる。  
時計がとまるー

ファウストは、「生」の最高の局面を求めて、満足することもなく生きてきたようだ。「生きる」ことは、時間に逆らうことではないし、「死」というゴールに向かって弛むことなく歩いていくことなのであろう。できる限りゆっくりと歩いていくほうがよい。歩みながら移ろいゆく形姿を繋ぎ止めようとするのが「生きる」ことなのか。しかし、「死」によってそれが「無」に帰するとするメフィストの言い分も真実だと思える。ファウスト自身も死後の世界を問題にしていなかった。砂の中に横たわっている老人の姿は、時計の止まった「死」の真実の姿であろう。

それでは、ファウストが繋ぎ止めようとしたメフィストの言う「最後の、出来損ないの、空虚な瞬間」とは、どのような時間であったのか。メフィストは過ぎ去っていく「時間」に全幅の信頼を寄せているようだ。それは、自らが「時間」と係わらない存在、命のない、つまり死なない存在だからなのか。

先の引用に戻る。

失明したファウストは、心の中を明るい光が照らしているのを知る。そこに、もとめていたものが映し出されているのであろう。どのような光景が映し出されているのか。外の現実が見えていないのだから、見えているのは、内の明るい未来がたっぷりと含まれた幻影に過ぎないのだろう。

ファウストは、最後の仕事として、山裾の長く延びている沼地から、悪臭を放ち人類の偉業を汚している泥を取り除くことを、目論んでいる。言及はないのだが、この泥はどうしてできたのか。老々夫婦のように、ずっと以前から海と向き合いながら、そこでは慎ましやかな人間の生活が営まれてきた。それでは、ファウストの干拓事業が始まって、この「泥」に問題が生じてきたのであろうか。そうであるなら、公害ということになる。海の自然環境や生態系は、山や森林から流れ下る無機物や有機物などの栄養素によって維持されている。それが、人為的影響でエコバランスが崩れていくことも多い。そのような事例を至るところで

見られる。

埋立にも二つの方法がある。辺野古の新基地埋立や泡瀬干潟埋立など、堤防を造って囲み、その中に他の処から盛り土をとってきて、それを埋めて土地を造成するのである。容量の二割増しぐらいの土砂を投入するが、必ず、地盤沈下の問題が起こる。関西空港などはその典型であろう。もうひとつは、諫早湾干拓事業や八郎潟干拓、また、オランダの干拓事業などがそうであるが、海岸や河口などに堤防を造り、最大となる干潮時に水門を閉じて仕切り、内部の水を排除していく。通常、海面が干拓地の陸地より高くなり、塩分の除去、土地の改良が必要となる。諫早湾の干拓地に、底生生物の死骸が一面に散らばる写真を見たことがある。シオマネキたちは、潮が満つるようにはさみを振り続けていたことであろう。

人類の偉業と誇る干拓地を悪臭がみたく。その原因となっている泥を沼から取り除くことが、最後の仕事だとファウストは考えている。最良の報償をちらつかせ、部下たちを叱咤激励する。だが、失明しているファウストには現実が見えない。ファウストは、メフィストと亡霊たちが取りかかっている墓堀の音を、最後の最大の仕事になされている音だと思い込んで、自らが描く協同社会の予感するなかで、メフィストとの賭けの言葉を言う。メフィストの言う「できそこないの空虚な瞬間」とは、この思い違いの時間である。確かにメフィストにはそのように思えるのだろう。だが、どうであろうか。「生きる」には多くの思い違いも必要であろう。それがなければ生きてもいけないし、死んでもいけない。ファウストのいう「人類の偉業」も、思い違いなのかもしれないのだ。

ファウストは、ここの干拓地で、勤勉な老若男女が自然と闘いながらも自由に協同して暮らしている、と考えているようだ。人間として結びつき、人びとが共に生きている光景を心の中に見ているようだが、登場するのは、リンコイスとメフィストフェレスやその手下、亡霊たちなどであり、人間らしきものの姿は見えない。

ファウストの言っていることはすべて、未来への夢であり、理想とする国家の理念である。すべては予感であり、願望にすぎないのだ。ここには、支配者としての決断と人間としての躊躇いの間で揺らいでいるファウストがいる。現在ではなく、呼びかける瞬間は未来であり、その予感を示しているにすぎない。果たして満足しているのかどうか。しかし、予感であったとしても、最高の瞬間として、ある「瞬間」に対して、この言葉を口にしたのだから、メフィストフェレスとの賭けの結果は明らかである。ファウストを地獄に落とすべきだとわたしは考えている。

しかし、気にかかる言葉がある。「天上の序曲」(PROLOG IN HIMMEL)で「主」(DER HERR)は、ファウストのことを「わたしの僕」Meinen Knecht)と呼び、「良き人間は暗い衝動の内にあっても / 正しい道を知っているものだ」(Ein guter Mensch in seinem dunklen Drange / Ist sich des rechten Weges wohl bewuß.)(328-9, S.18)と、そのことをメフィストフェレスが認めることになる、と言っている。このことは、ファウストが救済されることを示唆しており、それならば、ここのファウストの台詞に「正しい道」が示されていないと見なければならない。それについては、「救済」について論述するところで触れたいと思う。ただ

確認しておかなければならないのは、ファウストが、魔法や呪い、悪魔の意のままになるのではなく、「人間」として「自然」の前に立つ意志を示したことである。命を得て死んでいく一人の老人として「自然」の前に立つ、それは「神」の前に立つことでもあるのか。ファウストの魂のうちでは、悪魔との契約も解消されているのであろう。

先の引用箇所を続けて引用する。

CHOR.           Steht still! Sie schweigt wie Mitternacht.

Der Zeiger fällt.

MEPHISTPHELES. Er fällt, es ist vollbracht.

CHOR. Es ist vorbei.

MEPHISTOPHELES. Vorbei! ein dummes Wort.

Warum vorbei?

Vorbei und reines Nicht, vollkommnes Einerlei!

Was soll uns denn das ew'ge Schaffen!

Geschaffenes zu nichts hinwegzuraffen!

„Das ist's vorbei!“ Was ist daran zu lesen?

Es ist so gut, als wär' es nichts gewesen,

Und treibt sich doch im Kreis, als wenn es wäre.

Ich liebte mir dafür das Ewig-Leere.           (11593-603, S.349)

合唱.                           止まった！ 真夜中のように静まりかえる。

針は落ちた。

メフィストフェレス.   落ちた、成し遂げられた。

合唱.           過ぎ去った。

メフィストフェレス.   過ぎ去った！ ばかげたことを。

なぜ「過ぎ去った」というのだ？

「過ぎ去った」と「なにもない」ということ、完全に同じこと！

「永遠の創造」とやらおれたちにどうだというのだ！

創られたものを無へとひったくこと！

「それは過ぎ去った！」これをどう読めばよいのだ？

なにもなかったような言い草で、

なにかがあったように、堂々巡りをしている。

おれは、こんなことより「永遠の虚無」が好きなのだ。

メフィストフェレスは、ファウストに仕えた長い年月を想いながら、感慨に浸ろうとするその時に、雲行きがおかしくなってきた。「事が成った」というメフィストフェレスにたい

して、合唱は「過ぎ去った」と唱和する。「事が成って」終わるということと「過ぎ去る」は、結局「虚無」に帰することで同じなのだと強調するのだが、メフィストフェレスもなにかそうでないものを感じているようだ。第一部の最終の場『牢獄』(Kerker)の最後の雰囲気を取り戻させる。この場の「合唱」を、工事監督のメフィストフェレスが墓掘のために連れてきた手下の「死者の霊(死霊)(Lemuren)たちが引き受けている。引用したこの合唱も、「死霊」たちによるものと考えるのが妥当である。それなのにメフィストフェレスの気に障るようなことを、どうして唱うのであるのか。

「事が成った」と「過ぎ去った」ではどう違うのか、同じだと頑なに言い張るメフィストフェレスに、なにか厭な雰囲気に感う姿が感じられる。『「永遠の虚無」が好きなのだ』というもの、虚勢を張る姿にしか見えない。

(2023・6・21)